

△在外研究報告▽

マジソン滞在記

はじめに

数えてみると、帰国後まだ五ヶ月も経っていないというのに、マジソン (Madison) のことは、まるで遠い昔の出来事でもあるかのように感じられる。しかし、それは、マジソンで生活が臚げな遠い過去の記憶の底に沈み込んでしまったという感じではなく、むしろ今見ている夢のように生々しい感じなのではある。この五ヶ月近くの東京の時間が、あつと言う間の瞬時の出来事として終ってみれば、顧みるマジソンのことは、まるで夢でも見るように現われてくるほかはないというだけのことかもしれぬ。

シカゴ経由で直行したマジソンは、若葉香る、初夏に向う季節であった。四歳になったばかりの長男が、この若葉の香りを臭いと言って憤った顔は今でもはっきりと思い出す。それは、吸い慣れた東京の排気ガスの臭いとはあまりにも違つ

袴 谷 憲 昭

た香りに対する子供らしい反応の仕方だったのだろうが、その長男も、忽ちマジソンの自然の中へ融け込んでいった。マジソンで物心つきはじめたといつてよい次男にとっては、その変化はもっと自然なものであつたかもしれない。確かに、子供は夢など見ていたわけではないのだ。ずっしりと手応えのある現実の中で逞しく育つた息子どもの姿を思えば、親の夢もたちまち現実へ引き戻される。しかし、留学の学問的成果を問われる親の身にすれば、現実はいくまでも夢であつてくれと願っている気持の方が強いのもかもしれない。

ともかく、家族抜きではとても現実とは思われない私の留学ではあつたが、大学はなにも「子守り留学」のためにお金を出してくれたわけではないし、学部の先生方もそんなことのために私の不在の犠牲に甘んじてくれたわけでもない。そんなことを思うと、私も胸を張って留学の成果のみを誇つてみたい気持に駆られるが、所詮過ぎ去ってしまったことを今

更故意に取り繕うことは許されない。以下、家族のことはできる限り切り離して報告に及ぼうとは望んでいるが、その痕跡すら留めまいとすることは難しかろう。本報告を「留学記」とはせずに「滞在記」とした由縁である。

一 滞在環境

私は、駒沢大学在外研究員として、昭和五十六年四月二十五日より、昭和五十八年二月二十五日まで、ちょうど一年十ヶ月日本を留守にし、その間、特別な旅行を除き、大半は、アメリカ合衆国、ウイスクンシン州のマジンソン市に家族と共に滞在した。以下、その滞在環境についていろいろ報告したいと思うが、その前に、なぜ私がこの地を選んだかについていささか述べておきたい。

(一) 滞在地決定まで

事が留学地としての選択であった以上、その表向きの最大の理由は、マジンソンが、北米大陸で最初に仏教の専攻課程の開設されたウイスクンシン大学(The University of Wisconsin-Madison)を擁していたからであったのは言うまでもないが、私の本音は、そのマジンソンの近くに、私がたまたま日本で親しくすることのできたジョン・キーナン(John Keenan)氏が住んでいたことにあった。同氏は、昭和五十三年夏から翌年春にかけて家族と共に日本に留り、長尾雅人先生や高崎直道

先生について、玄奘訳『仏地経論』を中心に唯識思想の研究に励まれたのである。その間、昭和五十三年秋には、高崎先生の御紹介を機縁に、毎週火曜の夕方、私の研究室で同氏とお会して議論する機会を持つことができた。議論の方は、お互いが話すことにかけては先方の国語に通曉していなかったため、日本語と英語のチャンポンにならざるをえなかったし、具体的な質疑に関しても一体どれほど彼の役に立っているのか甚だ心許無いことであったが、彼が毎週熱心に私の研究室へ足を運んでくれることは私にとっても非常に嬉しいことであった。いつかは御家族共々同氏を我が家にお招きしたいと思うようになったのは自然のなりゆきであったが、昭和五十四年春、突如、帰国の報に接した時には、我が家はなんの持て成しもできぬ状況に追い込まれていた。次男の尋常ならざる出産が我が家を見舞っていたからである。かくして、御家族に日本でお会いする機会は失したが、十八歳で交換留学生として来日したのを手始めに、その後も日本文学の研究を続けておられるという奥様とは、その素晴らしい日本語を介して、数度、電話越しにお話することができた。

帰国後、キーナン氏は、日本での研究成果を踏まえ、それをPh・D請求論文としてまとめられ、ウイスクンシン大学、仏教研究課程に提出、昭和五十五年十二月に無事学位を取得された。それが *A Study of the Buddhahūmyūpadesa* .

*The Doctrinal Development of the Notion of Wisdom in Yogācāra Thought*で、インド仏教思想史上における唯識説の位置づけを試みた第一部と、玄奘訳『仏地経論』の訳註研究を中心とした第二部とからなる、計八九六頁に及ぶ大著である(私は、渡米後に、University Microfilms Internationalによるコピー本を頂戴することができた)。これに先立つ昭和五十四年秋には、同氏から、私のある論文を英訳して公表してもよいかとの依頼があり、以来、これを巡って音信も続いていたが、私が在外研究員に申請してみようという気になったのが五十五年十月、当然、キーナン氏とのんびり唯識のことを勉強してみたいという希望は念頭にあったのである。それ以外の希望地が全くなかったわけでもないが、外国語を話す能力を全く欠除しているという自覚が、アメリカ以外の地をほとんど考慮に置かなかった最大の理由であったかもしれない。キーナン氏とならなるとか意志の疎通もできる、それに、あの素晴らしい日本語を話す奥様もいらっしゃるではないか、そんな虫のよい考えが念頭を掠めなかったと言えは嘘になる。ところが、この申請は、他に希望者もなかったことにより、思いもかけず通ってしまったのである。

留学地はその時点でも変更可能だったようであるが、話は急に現実のものとなり、私は当初の希望どおり事を進めることに決意した。その後、キーナン氏と具体的な連絡を取るか

たわら、昭和五十六年一月二十二日には、同氏の恩師でもあり同大仏教科主任でもある清田實(Minoru Kiyota)先生に対し、平川彰先生より頂戴した推薦状を送付し、翌日には、必要書類と共に清田先生宛の私信を始めて認めた。清田先生及びキーナン氏には、滞在後も筆舌に尽し難いお世話になったが、私の受入れ準備に関しても、一切合財のお世話を頂くことになったわけである。その御恩は生涯決して忘れるものではない。お蔭で、私及び家族はただ体を運ぶだけでよかった。そのころ私が抱え込んでいたデルゲ版唯識部の文献解題の仕事こそくさと終えるや、私共はシカゴ直行のノースウエスト航空の機上の人となったのである。昭和五十六年四月二十五日のことであった。

(二) マジソン市

一口にマジソンと言ってはみても、一般にそれほど知名度の高い市まちとは思われない。ミシガン湖沿いの大都会、シカゴやミルウォーキーなら誰でも知っているようだが、実は、そこからさほど遠くはない地点にマジソンは位置している。ミルウォーキーとは、北緯四三度線上にはほぼ横に並ぶ西側の市、シカゴからみれば、やや斜めの北西方向に上った市である。ミルウォーキーからはバスで約二時間、シカゴからは約三時間半の距離にある。人口は、一九七九年の統計で、約十七万強、街並みは、四つの小さな湖に囲まれて美しく拡がっている。

人口は日本人の私共からみればあまり多いとはいえないが、このマジンソンがウイスコンシン州の州都であると同時に、同州立大学中最大のマジンソン校をかかえた、いわば行政と大学の市なのである。

市の中心部は、四つの湖中最も大きなメンドータ湖 (Lake Mendota) とモノナ湖 (Lake Monona) とに囲まれた細長い地峡 (Isthmus) 上にある。その地峡の小高い地点に蔽と構えた州会議事堂 (capitol) が名実共に街の中心をなす。一九〇五年に着工され一九一七年に完成されたという、ワシントンの国会議事堂を模したかに思われるその美しい建物は、メンドータ湖からはもとより、街の大概の地点からも見通すことができた(というよりは、見通せる範囲を大きく飛び越えて行動したことがないと言った方が正確かもしれない)。大学構内は、街の北側に位置するメンドータ湖の南岸沿いに細長く広がっているが、その構内の東端、大学図書館脇の遊歩道を真直ぐ東の州会議事堂の方へ延長させた通りがステートストリート (State street) で、わずか一キロほどの道程ながら、下町 (downtown) の目抜き通りをなす。独立記念日やハロウィーン (Halloween) などの催し物がある時に、学生や人々で賑わうのがこの通りである。

以上が、市の中心部の概略であるが、これを取り巻く市全体は、むしろ芝生と木々の間に点在する住宅街と言った方が

よいかもされない。ここで暮らすことは、アメリカの人にとっては歴とした都会生活 (urban life) なのであるが、東京から出向いた私共には田舎生活 (rural life) を楽しむといった表現の方がびったりするように思われたのも故なしとしない。現に息子は、当初、若葉の香りを憤ったわけであるが、それほどマジンソンは空気も澄み自然の草木にも恵まれた街なのであった。シカゴで飛行機を乗り継ぎ、市の北東部にあるマジンソン空港 (正確には Dane County Regional Airport) に始めて降り立った時、私は一瞬、北海道の根釧原野にある釧路空港にでも着いたかのような感じに打たれた。私の生れた北海道の根室は、マジンソンとほぼ同じ北緯四三度くらいのところ位に位置するが、確かにマジンソンは北海道に似ていたかもしれない。市から小一時間も車を飛ばせば、必ず広大なとうもろこし畑が拡がり、そこに点在するサイロや牛舎は北海道のそれにほとんどそっくりだったのである。しかし、気候の方は、ほぼ緯度も同じ根室とは比較にもならぬくらい、夏は暑く、冬は寒かった。

(三) 大学と図書館

街の様子もそうであるが、大学の様子も写真や図版などを見て頂くことができれば一目瞭然なのであるが、文字による報告ではそれができないのが残念である。もっとも、たいした写真も準備できなかった私には、そんなことを言う資格

すらないかもしれない。過日、我が仏教会主催の報告会で示したスライド写真はあまり出来がよくないとの評判を取ってしまったからである。確かに、帰国間近の冬の日の午後には撮った写真は、いずれも深く長い影を落し、我れながら決して上出来とは思えなかった。

いずれにせよ、建物や構内の様子は見て頂くことができな
いわけで、ここでは大学の概略のみを記そう。一八四八年、
州憲法のもとで創設され、翌年二月五日、十七人の学生で発
足したといわれるウイコンシン大学マジソン校 (The Uni-
versity of Wisconsin-Madison) は、現在、十三学部、一二四
学科をかかえるアメリカでも有数の大学である。ここに属す
る教職員数は、二、二九八名の学部教官 (faculty members)
を含めて、一三、三九八人、学部学生数は約四万、院生も約
一万に及ぶ。敷地も、他のアメリカの州立大学と同様に広大
なもので、上述の大学図書館近辺を東端とし、メンドータ湖
畔沿いにずうっと西の方に延び、イーグルハイツ (Eagle
Hights) と呼ばれる宿舎を容した高台で終る。その総面積
は、九〇三エーカー、約一一〇万坪に当り、我が駒沢大学の
七十倍を越す広さである。この他に構内以外 (off-campus) の
所有地や、実験農場等の土地を含めると、ざっと見積っても
皇居の三十倍を優に越えてしまう広さになるが、これは私の
実感しえた場所ではないから省略する。

もっとも、大学の充実度は、規模の大きさのみでは計りき
れないわけであるが、研究業績に関しても、アメリカの全大
学中の十指に数えられる学部も多いようである。しかし、そ
ういった評価の真の意味合いは私には分りかねることなの
で、ここでは、大学のいわば中心的研究の場ともいべき図
書館のことを簡単に紹介しておきたい。Memorial Library
と呼ばれる大学中央図書館は、上述のごとく、構内の東端に
位置し、建物の外観自体はあまり変哲もない四階建地下一階
の建物であるが、勉強する学生や研究者にとってここが最も
快的な場所の一つであることは間違いない。十八のブランチ
(branch) を含めた蔵書総数は三五〇万冊強、その大半がこの
Memorial Library に所蔵されている。日本の大学図書館と
較べて、まず驚くことは、蔵書数の多いこともさることなが
ら、その開館時間の長いことである。各サーヴィス部門にお
いて多少の出入はあるが、原則的な開館時間は、月曜から木
曜までは午前八時から午後十一時四十五分、金曜は午前八時
から午後九時四十五分、土曜は午前十時から午後九時四十五
分、日曜は午前十時から午後十一時四十五分、しかも年中開
館していると言ってもよいくらいで、年末年始の数日が休み
になるに過ぎない。夏休みに原稿を書こうものなら、すぐ閉
館日を気にしなければならぬ我が大学図書館とは大した違
いである。なお、正面玄関を入った一階の左右にある学生閱

覧室(Study Hall)が夜中の二時四十五分まで開館していることを知った時には呆気にとられたが、そんな時間まではこちらの方が確かめようもない。

さて、この辺で、仏教を研究する者の立場から館内を一瞥しよう。館内は、アメリカの多くの図書館がそうであるように、フリーパスで全館開架のシステムがとられている。館内で本を見る分には、どこでなにを読もうと勝手、読んだものは読み捨てたままでも一向に構わない。もし館外に持ち出しなければ窓口(Circulation Desk)で正式な手続を取ればよい。これをやらずに本を持ち去れば、出口のブザーが鳴ってたちまち差し押えられるというだけのことである。仏教関係の図書は、日本で出版された本を含め、基本的なものとはほとんど納められている。分類の関係上、その多くは、一階北側の書庫に所蔵されており、残りについても、せいぜい中一階や二階の書庫に足を運べば事は足りた。更に二階北側の書庫の奥には、日本や中国で出版された基本参考図書を集めた閲覧室(East Asian Reading Room)が堂々と構えている。そんなこともあって、私は、図書館の三階以上には、ほとんど上ることなく済んだのである。なお、私の個人的関心から特に羨ましいと思ったのは、チベット関係の図書がほとんど全て自動的に寄贈されているということであった。アメリカ国会図書館の増加図書目録(*The Library of Congress Accessions*

List)によれば、この図書館へは、Bangladesh, Bhutan, India, Nepal, Pakistan, Sri Lanka のアジア諸国より、そこで出版になった図書が自動的に送り込まれているのである。そのうち、最も多いと思われるのが、インドで出版されるチベット関係の図書である。整理が追い着かず、未整理に終わっているのも、大半はこのチベット関係の図書であるとも聞いたが、仮の番号でカードに登録さえされていけば、窓口を通じて利用できるサーヴィスの好きには驚いたこともある。

四 南アジア研究科

Memorial Library から、湖畔を背にした Memorial Union と呼ばれる学生会館(食堂ほか、劇場や宿泊施設を備えた建物)の前を過って西の方へ進むと小高い丘になる。その西側斜面に、マッチ箱を立てたような十八階建ての高いビルディングがある。恐らく構内で最も高い建物と思われるが、これが Van Hise Hall と呼ばれる、私の所属した南アジア研究科(The Department of South Asian Studies)のある建物である。十五階より上には大学の行政を司どる部局があり、十七階には総長(President)室がある。一階から五階までは主に教場であるが、六階から十四階にかけては、世界各国の言語や文学の研究に携わる学科が、研究室を中心に層をなしている。南アジア研究科は、その十二階の西側を占め、東アジア言語文学科(The Department of East Asian Languages

and Literature)が東側を占める。

南アジア研究科の現在の長 (Chairman and Director) は助教授 (Associate Professor) でテルグ (Telugu) 語の先生でもある V. Narayana Rao で、私も当研究科の名誉研究員 (Honorary Fellow) であることを証してもらった書類の発行についてはお世話になった。しかし、この研究科の実質を掌握しているのは、テニユア (tenure, 定年までの雇用を保証された人) で教授の A. K. Narain, Frances Wilson, 清田實 (Minoru Kiyota) の三先生である。A. K. Narain 先生は『*The Indo-Greek*, Oxford, 1962, *Seminar on the Local Coins of Northern India, c. 300 B. C. to 300 A. D.*, Varanasi 1966, *From Alexander to Kanishka*, Varanasi 1967 などの著書を著わしたインド史家で、国際仏教学会 (The International Association of Buddhist Studies) の学会誌 *The Journal of the International Association of Buddhist Studies* の編集主幹 (Editor-in-chief) でもある。私も二、三の会合でお目にかかる機会を得たが、その学会誌に、禅に関するある書物の書評を頼まれ、それをお断りして以来お会いしたことはない。Frances Wilson 先生はサンスクリット語やプラークリット語を担当している比較的老年の女の先生であるが、始めに紹介して頂いた時にお会いしただけで、その業績についても私はほとんど知るところがない。清田實

先生は、始めに述べたとおり、私が公私にわたり終始お世話になった先生である。清田先生には『*Shingon Buddhism: Theory and Practice*, Los Angeles-Tokyo, 1978, *Gedatsu-ukai: Its Theory and Practice*, Los Angeles-Tokyo, 1982, *Tantric Concept of Bodhicitta: A Buddhist Experiential Philosophy*, Madison, 1982 などの著書の他、多くの研究論文があるが、大学の職責上最も重要なことは、仏教研究の Ph. D 取得課程 (Buddhist Studies Ph. D. Program) の主任 (Chairman) を務めていたことである。

この課程は、南アジア研究科が、まだインド研究科 (The Department of Indian Studies) と称していたころの長、故 Richard H. Robinson 教授 (一九二〇—七〇) によって、一九六一年に開設され、それが、北米大陸におけるこの種の課程の誕生に先鞭を着けたのである。故 Robinson 教授の魅力的な人柄や業績については、同教授の追悼論文集『清田實編 *Mahāyāna Buddhist Meditation: Theory and Practice*, Honolulu, 1978 の巻頭で、清田先生御自身が簡潔に触れられているので参照されたい。Edward Conze, Alex Wayman や、我が国の長尾雅人先生、梶山雄一先生などが招聘され教鞭を取られたのもこの Robinson 教授の代であったと聞く。同教授の遺稿は、現時点では出版の価値が無く反故にされたとの噂も耳にしたが、一九七〇年、彼の不慮の

事故死の後を継いで、仏教研究のPh・D取得課程の主任の席を埋められたのが清田實先生で、一九七三年から一九七七年まではその席を空けられたものの、爾来今日に至るまで、仏教研究を志す後進の指導に当たっている。我が仏教学部の平井俊榮先生や岡部和雄先生が、この地に立寄られ、あるいは比較的長く滞在されたのも、仏教研究に対するこのような着実な伝統が培われていたからなのである。なお、同課程にあって、清田先生の御指導の下に、Ph・Dの予備試験 (Pre-liminary Examination) を終えた後、日本で更に仏教に関する個別的テーマを研究する院生は、先のキーン氏を始め、最近でも数人を数える。このような院生は、漢文 (Classical Chinese) を主要聖典語 (Major Canonical Language) として選ぶ、近代語 (Modern Languages) としては日本語を第一語学に選んだ人に多い。

ところで、同じ課程で仏教の研究に志す学生にとって、清田先生とはまた違った意味で大きな影響力を持っている人として、やはり南アジア研究科に籍を置くチベット人学僧、Geshe Sopa 先生を挙げなければなるまい。Sopa 先生は、一九二五年に、チベットのツァン (Tsang) に生まれ、後ゲルク派 (dGe lugs pa) の僧としてラサ (Lha sa) のセラ (Se ra) 寺でゲシェー (dge bshes) の学位を取った第一級の学僧である。彼がウイスコンシン大学に招かれたのはやはり Robi-

nson 教授の代であったらしいが、チベット仏教を専門に勉強しようとする学生には爾来深い人望を得ているようである。業績としては、その弟子 Jeffrey Hopkins との共著 *Practice and Theory of Tibetan Buddhism*, London, 1976 などがあるが、その真骨頂は、チベット僧院風の伝統を守った教授法にあると思われる。それが、チベット仏教を信仰する学生、もしくはチベット仏教に深い敬愛を注ぐ学生たちにはたまらない魅力となって写る反面、仏教を批判的に研究しようと思っている学生にはむしろその足をチベット仏教から敬遠させる結果ともなっているのである。

従って、アメリカ唯一の長い伝統を誇るこの仏教研究のPh・Dの取得課程も、実際の学生の動きは、漢文を主要聖典語とする学生と、チベット語を主要聖典語とする学生とに二分される傾向にあるように思われ、互いにそれぞれの成果を虚心に評価しあえないような状況になっていることは、私の眼から見れば誠に惜しむべきことである。そして、その遠因は、あるいは、元来インドで起った仏教をインドのサンスクリット仏教原典に即して教授しうる強力なスタッフを同課程が欠除していることにあるのかもしれない。同課程が、南アジア研究科と東アジア言語文学科と相俟って、単なる文献学に終ることなく、アジア諸国の文化をその個有のコンテクストにおいて深く理解しようとする伝統に立っているだけに、

その将来を期待し、敢えて余計な心配をしてみせただけのことであるが、私はあくまでも単なる外来者に過ぎない。実際そういう局面に身をおいて、右のような状況にも触れた論文に、私の滞在中共に学んだ院生、ポール・グリッフィス (Paul Griffiths) の “Buddhist Hybrid English: Some Notes on Philology and Hermeneutics for Buddhologists”, *The Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 4, No. 2, 1981 がある。部分的には直ちに承服し難い点もあり、その点については滞在中に話し合ったこともあるが、私の思い出も込めて、今ここに、右の論文名のみを紹介しておく。なお、私は、上述のごとく、ほとんどマジソンを出ることもなかったため、南アジア研究科を、アメリカの他の大学における同種の課程と比較して言及することはできなかったわけである。少し前のことになるが、北米の大学における仏教研究の全般的様子については、昭和五十一年四月から九月にかけての約半年間、カナダやアメリカの諸大学を訪ねられた、平井俊榮先生の「新北米大学事情——U・B・Cとアメリカの大学——」(本論集、第八号、二二七—二四三頁) をぜひ参照されたい。

(四) 大学宿舎

南アジア研究科のある Van Hise Hall から更に西側へ突き進んで行けば、大学病院が見えてくる。このあたりで、均

等に建ち並んでいた構内の建物も少し疎になる。大学病院を中心とする一帯には、野球場、運動場、駐車場、テニスコート、サッカー場などをかかえた広い芝生が広がっている。大学所有の行楽地 Picnic Point が細長くメンドータ湖に迫り出ているのもこのあたりである。Picnic Point の入口を過ぎると道はぐるりと高台の裾を取り囲むようになっていく。この高台が前述の Eagle Heights で、大学構内の西端を占めるかなり広大な一角である。そこには、Eagle Heights Apartments と呼ばれる結婚した院生のための宿舎と、University Houses と呼ばれる教員のための宿舎とがある。私共は後者に住んだが、敷地も規模も、当然のことながら、前者の方が圧倒的に大きい。前者が収容しうる世帯数は一、〇〇〇を越えるが、後者のそれはちょうど一五〇で敷地内の南西の一角を占めるに過ぎない。しかし、もとより両者の間には厳とした仕切りがあるわけでもなく、私共も、より広くより豊かな芝生をかかえた Eagle Heights Apartments の方を子供連れでよく散歩したものである。また、私が親しくした数人の院生は、幸いなことに、全て University Houses 寄りの宿舎に住んでいたため、連絡を取り合うのは頗る便利であった。このあたりは、大学東端の建物からはかなり離れていることになるが、バスを利用すれば、歩くのを入れても、三十分かからずに確実に目的の校舎へは行ける

のである。そのために私が利用する最寄りのバス停も、私の親しくした院生の宿舍の前を突きぬけた通りにあった。

さて、このへんで、私共の住んだ University Houses の描写に焦点を絞ろう。ここに至る正式の入口は、高台の裾を取り囲んだ道を最も奥まで進んでから上り切った、バス停とは逆のところにある。その道を上り切る前に背後を振り向くと、大学病院を中心とする広い芝生を前景に、大学構内東側にある建物や街の家々を見晴せるという寸法である。坂道は木々に囲まれ、夏は鬱蒼としている。それを思うと、マジソンの夏の心地よい暑さが今にも甦ってくるようだ。宿舍の事務所 (Family Housing Office) の前を過ぎて入口に到ると、そこから右手に発する左廻りの楕円状に、一番から四十一番までの番号を付された建物が互いに向き合いながら並んでいる。奇数番号の家は外側、偶数番号の家は内側にある。四十一番目の建物が入口のすぐ左手にあって、左廻りの楕円状の家並みを締め括っていることはいうまでもない。建物の番号には、十箇の欠番があるので、実質上の建物の数は三十一になる。私共の住んだ建物は四十一番中の三十一番目であったが、その位置が私共には頗る気に入った。Eagle Heights Apartments を含めた宿舍の全敷地内で、そこが、どこから見ても一番奥まったところであり、建物の正面は南向き、右手前方には一、〇〇〇坪ほどの畑 (University Houses Garden)

をかかえた原っぱが拡がり、建物のすぐ後方には、インディアンの古い墓地 (Indian Mound) に連なる手ごろな雑木林の山が控えていたからである。

一つの建物は、四世帯ないし六世帯が住めるように造られているが、私共の建物は、3LDK (あちら流に言えば、単に three-bedroom) の二世帯と、1LDKの四世帯、計六世帯の住める造りであった。3LDKは左右に壁を接した二階建、1LDKは左端右端のそれぞれ上下に中央の二世帯にそっぽを向くように壁を接していた。私共は中央左の3LDKに居したが、隣りの3LDKとは、台所のドアを通じて一メートル四方ほどの勝手口を共有するような造りになっているので、自然この隣家とは親しくなる道理である。比較的移動の多い宿舍内では、一年半以上も滞在した私どもはむしろ長く住んだ部類に属し、その間隣家も三家族入れ替ったが、特に最後に越してきた韓国の辺さん一家とは、お互いほとんど同じくらいの子供をかかえていたこともあって、非常に親しくしてもらった。しかし、例外はあるもので、辺さん一家の前にもシガンから越してきて住んでいた Hornemann 家とは、始めのうちには子供を我が家で預ってあげたこともあったが、後には口もきく気になれなかった。車を二台持ち、その二台目を、車のない我が家の空いた駐車場へ、近々売り払うからと一度断って置いたきり、ついに最後に引越すまで動か

す気配も示さなかった(二台目以上の車については、然るべき手続をとって有料で駐車しなければならぬのが規則)ほか、極常識的な規則さえ守らなかつたからである。しかし、引越したのは、マジソン市内に家を買ひ求めたからであつて、その後も幼稚園の会合などではその奥さんとしばしば顔を合わせる事になつた。主人は生化学者で、たぶん立派な業績を挙げてテニユアにでもなつたからこそ、市内に家を買う気にもなつたのだらうが、私とは所謂縁なきタイプの学者である。ここで駒沢大学の名誉のために言っておくが、私が車を買わなかつたのはお金がなかつたからではない。せいぜい飲酒運転に終るほかはない亭主の運動神経に女房が全然信頼を置かなかつただけのことである。

隣家のことから、ついとんだ愚痴っぽい書きぶりになつてしまつたが、そんなことは言うなればほんの些細なことに過ぎず、私共にとつて University Houses が頗る快的な居住地であつたことはそれによつてなんら値引く必要もない。月に、三三二ドル(後、値上げして一九八二年七月より三六五ドル)、円にして七、八万の家賃を払つて、東京の自宅を上下に重ね合わせたような広さの家に住み、家の中はどんなに寒い冬でも夜を通して摂氏二十四度を下ることなく、暑い夏には散策する戸外に事欠くこともない。ここが、子供にとつて自由に羽撃ける天国であつたことは無論のこと、親にとつてもまた

同様であつたことは言うまでもない。あまり快的過ぎて、ついで子供と一緒に遊んでしまいたくなるのが最大の欠点であつたともいえるのである。私共がこの家に住むようになったのは、Ivy Inn という清田先生のお宅に近い宿に三週間ほど泊つた後のことであつたが、以来マジソンを出発する二日前までここを動くことはなかつた。宿から University Houses に越す時には、清田先生御夫妻は勿論、今は京都にいる当時の院生、ジェイミー・ハーバード (Jamie Hubbard) 夫妻、ポール・スワンソン (Paul Swanson) 夫妻に大変お世話になつたことを今にして忘れない。なお、その University Houses への入居月日などは、私共がまだ日本に居るうちに決つたことで、契約書、敷金(一〇〇ドル)の送付などは、直接、大学宿舍供給課 (Division of University Housing) を通じ済ませてあつたが、最も重要な最初の申請手続や、入居が決つた後の前住者からの家具の買付け等のことは、専ら清田先生や、ジョン・キーナン氏にやっていたことなのである。私共の快的な生活の背後には、こういう方々の教知れぬ御好意があつたことを私共は深く肝に銘じている。また、三十一の建物にまたがる一五〇世帯の中、常に日本人家族がその一割以上を占めていたことは、入居した当初の私共には全く予想外のこと、びっくりもし喜びもしたが、そういう方々から受けた御好意にも忘れ難いものがある。

二 経過報告

人が行なったことを時間の軸に沿って延々と報告に及ばれたのでは読む方が堪ったものではない。それを承知の上ではあるが、これも半ば一種の義務かもしれぬと考え、他方自分の経過をまとめて示しておくのも悪いことではないとの考えから、以下単調な記述に及ぶことになるが、予めお許し願いたい。日記などというものは、『三太郎の日記』並みの青臭い文章を書いていた時期を葬り去って以来書いたこともないが、四十歳に手が届かんとしてこの種のノートを用意しなければならなかったこと自体が気恥しい。勿論、それは、日記というよりは単なるメモであるが、以下はそれから抜粋した一握りの事項に多少の説明を加えたものである。

(一) 最初の夏休み終了まで(昭和五十六年四月―八月)

四月二十五日(木) North West Orient 航空、第四便、午後四時四十五分発、シカゴ行にて、約十分ほど遅れて、成田国際空港を後にす。

四月二十五日(木) 二十分ほど遅れて午後二時二十分ころ(日本と、シカゴやマジンソンの位置するアメリカの Central Time の地区とでは、時差が十五時間、夏時間の場合は十四時間となる。その分、日本が進んでいて、日本時間では、二十六日午前五時二十分ころとなる)、シカゴ、オヘア(O'Hare)空港到着。入国手続

後、二時五十八分発予定の Ozark Air Lines 第五六七便への乗換えを急ぐ。飛行機は結果的に約二時間近く出発が遅れ、マジンソンへは午後五時ころ到着。清田先生御夫妻、キーン氏御夫妻のお出迎えを受け、宿の Ivy Inn に到る。

四月三十日(火) 午後三時から五時、清田先生のクラスにて、キーン氏、拙稿「唯識説における仏の世界」の英訳“The Realm of Enlightenment in *Vijñāpīṃśratā*: The Formulation of the “Four Kinds of Pure Dharmas””を中心に発表、私も参考意見を述べるべく出席。

五月十四日(木) Ivy Inn より University Houses に引越す。夕刻、引越を完了し、お手伝い頂いた方々と夕食を共にす。

六月二十六日(金) キーン氏を始めとする有志の求めに応じ、Eagle Heights Community Center の一室にて、『撰大乘論』第十章、及びその関連全文献の講読を開始す。

この日は、資料紹介等を含め『撰大乘論』について多少説明を与えたに止まるが、以後、夏休みの間は、毎週金曜日、一時から五時まで、同室にて講読を継続す。

七月十日(金)―十八日(土) ダライラマ十四世、マジンソンに招聘され、チベット仏教行事盛大に催さる。この間、大学構内にては、ダライラマの記念講演会、及びチベット仏教に関する諸学者の講演会が行われ、マジンソン郊外の Dear

Park については、Kalachakra Initiation が挙行される。私もこの行事の一部に参加し、Robert Thurman 教授 (Amherst College) の “The Four Main Schools of Tibetan Buddhism” などを聴講す。

八月七日 (金) — 九日 (日) The International Association of Buddhist Studies (国際仏教学会) の第四回学会がウイスコンシン大学で開催される。私は、八日午後、第三部会にて “The Akṣarāṣi-sūtra and the Bahudhātuka-sūtra in Relation to the Historical Background of the Yogācāra Literature” の論題にて発表。

(二) 最初の秋学期 (昭和五十六年九月—十二月)

九月十日 (木) 秋学期開始に伴い、『撰大乘論』の講読会、所を Van Hise Hall の演習室にえ替へて講読。受講者、六名。以後、毎週木曜日、午後二時二十分より五時まで、同室において継続される。

九月二十四日 (木) 「敦煌出土チベット語唯識文献」の原稿に着手。

十月三日 (土) 留学延期の申請を決意す。

十月四日 (日) 清田先生に留学延期に関し推薦状をお願いし、早速に頂戴す。

十月五日 (月) 仏教学部教授会宛、正式の留学延期願を清田先生の推薦状と共に送付す。

十月十九日 (月) 早朝、国際電話にて、平井先生より、教授会にて留学延期願が承認された旨を受け賜わる (同じ知せば、当時の学部長、光地英学先生の十月三十日拝受のお手紙にても受け賜わった)。

十月二十三日 (金) 「敦煌出土チベット語唯識文献」脱稿。

十二月十七日 (木) 『撰大乘論』の講読会、秋学期を終了す。

(三) 最初の春学期 (昭和五十七年一月—五月)

一月二十一日 (木) 『撰大乘論』の講読会、春学期開始。受講者、七名。

一月二十七日 (水) この日より、Geshe Sopa 先生の Buddhist Epistemology のクラスに出、ゲドゥンドゥブ (dGe 'dun grub, 1391-1474) の『俱舍論』に対する註釈書の講読を聴講す。毎週水曜日、午後一時二十分より三時二十分までのクラスなり。

一月二十九日 (金) この日より、清田先生の History of Japanese Buddhism を聴講す。

三月二十七日 (土) シルウォーキーの Immigration and Naturalization Service 宛、ビザ延期の申請書を送付す。

五月十三日 (木) 『撰大乘論』の講読会、春学期を終了す。

五月十四日(金) 清田先生の春学期最後のクラスとてビクニック催され参加す。

(四) 二度目の夏休みから冬休みまで(昭和五十七年五月—十二月)

五月二十三日(日)—二十六日(水) セントルイスに住む吉田収氏(私の大学院時代の友人、現在はMissouri Zen Centerを開いて活躍)一家を家族で訪ね、旧交を暖む。

六月二十五日(金)—七月六日(火) 汽車にて、サンフランシスコ、ロスアンジェルス経由の家族旅行を楽しむ。

七月七日(水) この日より、Wisconsin English Second Language Institute の午前中週五日のクラスに出る。同月三十日(金)に終了。

七月二十二日(木) ミルウォーキーの Immigration and Naturalization よりビザ延期の許可を受く。

七月二十五日(日) キーナン氏の発案で、これまで講読した『撰大乘論』及び関連文献の英訳の再検討を行うべく、同氏宅に有志が集まる。以後、同種の会は、夏休み中に数度開催さる。

八月三日(火)—十四日(土) アメリカ東海岸の家族旅行を楽しむ。

八月十六日(月)—二十七日(金) 「チベットにおける唯識思想研究の問題」と題して原稿を執筆し、日本へ送付す。

九月一日(水) この日より、Wisconsin English Second Language Institute の夜週三日の英会話クラスへ通い始める。このクラスへは、セッション間の休み(十月十四日—二十四日)を除き、十二月九日までほぼ出席す。

九月二日(木) 『撰大乘論』の講読会を Van Hise Hall で行うことを断念し、純然たる有志の会であることを再確認す。

九月十二日(土) 院生のポール・グリッフィス(Paul Griffiths)宅で、『撰大乘論』の講読会を催す。以後、彼及びキーナン氏宅で、不定期に、同講読会を催すこととなる。

十一月七日(日)—二十日(土) 『駒沢大学仏教学部研究紀要』百周年記念号に依頼された原稿を「Mahāyānasūtra-ālamkāraṭika 最終章和訳」と題して執筆し、研究室宛に送付す。

十二月八日(水) 日本で開催予定の第三十一回国際アジア・北アフリカ人文科学会議(CISHAAN)における発表要旨を「The Old and New Tibetan Translations of the Samdhinirmocana-sūtra: Some Notes on the History of Early Tibetan Translation」として纏め、日本の事務局へ送付す。

十二月十六日(木) この日、キーナン氏宅で行われた『撰大乘論』の講読会をもってこの会を終了す。

十二月十九日(日)―三十日(木) 成田山仏教研究所の記念号に依頼されていた原稿「法身〱覚え書」を執筆脱稿す。

(四) 正月から帰国まで(昭和五十八年一月―二月)

一月三日(月)―四日(火) 吉田収氏 Minnesota Zen Center の帰路立寄りて一泊す。

一月五日(水) 年末脱稿の拙稿を成田山仏教研究所宛送付す。

一月十日(月) 貸出していた図書をすべて大学図書館へ返却し終ると共に、帰国にむけて荷造りに着手す。

一月十九日(水) 日本宛の荷物二十七箇を一括して船便にて送付す。

一月三十一日(月) 家具をほとんど売却し終る。

二月十二日(金) 息子の通いし幼稚園の最終日なり。夜、清田先生宅で送別会を催して頂く。

二月十四日(月) 大学宿舍供給課事務官による室内の点検を受け、University Houses のチェックアウトの手続を全て完了す。同日夜、Memorial Union 内のホテルに一泊す。

二月十五日(火) キーナン氏の車にて、清田先生宅よりお借りしていた寝具、食器類などをお返しに伺う。夕方、キーナン氏と大学付近のイタリア料理店で夕食を共にし、別れ

し後は、同上ホテルにてマジソン最後の夜を過す。

二月十六日(金) 午前十一時三十分発のシカゴ、オヘア空港行バスにてマジソンを後にす。キーナン氏御夫妻、ポール・グリッフィス氏の見送りを受く。同夜、オヘア空港近くのホテルにて一泊す。

二月十七日(土) 午前十時二十分発、United Airlines、第一便にて、ハワイ、ホノルル空港へ向う。午後四時三十分ころ到着、すぐタクシーにてホテル Outrigger Surf に至る。この日より八泊九日、家族と共にハワイ見物を楽しむ。

二月二十五日(金) 午前十一時三十分発、日本航空、第七十三便にて、ホノルル空港を後にす。

二月二十六日(土) 午後三時二十分、成田国際空港に着。一年十ヶ月ぶりに再び日本の土を踏む。

三 成果報告

玄奘三蔵は、経像を山と積み静かな弘法の念に燃えて長安に戻った。道元禅師は、空手還郷とて、裸一貫の充実した自己と共に京都へ帰り来った。まるで人物の柢も違う両先学を比較に出すことは片腹痛いことではあるが、私のマジソン滞在が、そのいづれでもなかったことだけは確かである。そんなことは、始めから分っていたことかもしれないが、私の留学が、いろんな人の好意や犠牲の上に乗っかっていたもので

あることを思えば、今更たいした成果もなかったと歎いてみたところで、せいぜい人の不快を買うのが落ちだろう。成果の質をとまかくとすれば、どんな人にも、暮してきた環境があり、過してきた時間の経過がある。以上は、そんな観点から、できるだけ卒直な態度で報告に及ぼうと筆を運んできたわけであるが、以下においても、できるだけ自分を茶化すことなく、滞在中の成果に触れることができたらと思う。しかし、それが簡単にできるくらいなら、文章に苦勞することも無いのだが、卒直であろうとする余り、万一筆が滑って、我れ知らず、不快なことを言うようなことでもあったらお許し願いたい。

(一) 『撰大乘論』第十章の講読会

私がどのような気持でマジソンを選びそこへ赴いたかということについては、既に触れたが、留学決定の正式通知があった後、大学教務部より求められた「計画表」にその気持を書き記したところ、後日発令された大学の公式文書（昭和五十六年四月一日付）では、たぶんその「計画表」に基づいたのだとは思われるが、私の「研究又は調査の目的」は「インド、チベット仏教の研究及び英語による会話、作文の能力増進」ということにされていた。それを見た時、出発を数週間後に控えて、気分がなんとなく重くなったことを今にしてははっきりと想い出す。私にとって、留学とは、日本の雑踏や雑事か

ら離れ、自由にのんびりと自分の時間を回復することだという身勝手な思い入れがあった。私の送行を祝って下さる先輩や同輩の方々も、その思い入れを増長しこそすれ、「しっかり勉強してこい」などという余計なことは一切口にされなかったのである。私はいい気になって、いつのまにか堂々と家族旅行にでも出かけるようなつもりになっていたかもしれない。しかし、そんなつもりでいながら同時になにかができるほど、自分は破格でも自律的でもないことを今回の留学では思い知らされた。

「インド、チベット仏教の研究」という側面では、デルゲ版唯識部を中心に、暇をみては自分なりにゆっくりと唯識の典籍を眺めてみたいと、出発間際ぎりぎりに縁の切れた、東京大学文学部印度哲学印度文学研究室編『デルゲ版チベット大蔵経論疏部』唯識部、全十六冊が完結し次第、全てをマジソンに送ってくれるよう出版社に依頼し、事は順調に進んだかに見えたが、これが、私の留学の前後の期間をも含めて、唯一の郵送上の事故となった。荷物が日本を出たことは確認できたものの、これがその後郵送途上でどこかに粉失してしまったのである。一時はすっかり諦めて、所謂着かぬ運命のものならばデルゲ版なぞ参照しなくなつてという気にもなつたが、留学延期決定後には仕方なく再度改めて注文し、それを全て受領し終えたのは、昭和五十七年一月二十日のことで

あった。因に、ウイスコンシン大学 Memorial Library には、同中観部は既に所蔵されていたが、唯識部は私の滞在中にはついに書架にその姿を見せることはなかったのである。しかし、私の使用した唯識部全十六冊は、大学図書館ではなく、親しく研究し合った中でも特にお世話になったジョン・キーン氏に差上げて帰って来た。

キーン氏を中心とする有志から、せっかくの機会だから『撰大乘論』でも読んでくれという話があった時には、デルゲ版が届いてから始めようなどと答えていたのであるが、結局はそれを待たずして開始したことは、右のような事故があったことを考えると確かに正解ではあった。なにごととも人の好意には従うものである。私にこの講読会がなかったら、私のマジソンにおける成果など、ほとんどゼロに等しいのだから、外的な環境のみならず、そこにおける成果すら、私の場合は他人の好意に乗っかっていたと言わなければならない。この講読会を続けた一年余の間には、むしろ私の方が面倒になって、何度か止めてしまいたくなくなったこともあったが、それを思いとどまらせてくれたのも私を取巻く有志の方々の熱心さであった。この会が私の滞在中どのように継続されたかということについては、先の経過報告において、その初回である昭和五十六年六月二十六日の記事を始めとし比較的詳しく言及したので、以下には、この会の様子や、現時点における

この会での成果を報告することにしたい。

この会で『撰大乘論』を読むように勧めてくれたのは、上述のごとく、キーン氏であったが、そのうちの第十章を読むことに決めたのは私であった。それが、キーン氏の研究した『仏地経論』の主題と最も深い関連を示す章だったからである。『撰大乘論』のテキストには、周知のごとく、仏陀扇多訳、真諦訳、達摩笈多訳、玄奘訳、及びチベット訳の計五本、そのヴァスバンドゥ (Yasubandhu, 世親) の註釈には真諦訳、達摩笈多訳、玄奘訳、及びチベット訳の計四本、アスヴァバーヴァ (Asvadhava, 無性) の註釈には玄奘訳、チベット訳の計二本があるが、私は、この会に集った主なメンバーが、漢文を主要聖典語 (Major Canonical Language) として選んでいる院生であったにもかかわらず、本文及び両註釈それぞれについてチベット訳を基本に読み進めることを宣言し、漢訳については各自が分担して断えず参照してくれるよう依頼した。ただし、真諦訳のヴァスバンドゥ註は、一応独立の作品として取扱わねばならぬため、本文及び両註釈と共に教場で平行して読み進めることにしたところ、その初め一回ほどは、ジェイミー・ハーバード氏が担当し、その後は、ポール・スワンソン氏が替ってその任に当り、昭和五十七年秋に京都の大谷大学留学のためにマジソンを去るまで、極めて熱心に真諦訳の英訳に従事された。

ジェイミーはこの会の始まった秋には、その研究テーマである三階教について更に日本で学ぶため、フラブライト留学生として来日し、当初は、駒沢大学にも来ていたと聞くので、知る人も多いかも知れないが、日本語も上手で、私とは数ヶ月の出合いであったけれども個人的には非常にお世話になった。ポールにいたっては、日本で育ち、上智大学を卒業して東大の宗教学科にも籍を置いたことがあると言うくらいであったから、彼の話す日本語たるや、顔を見なければ、日本人と思われてもなんら不思議はないほどだったのである。彼は、私と出会った当初は、日本天台を研究すると言っていたが、昭和五十六年秋にマジンソンを訪ねた大谷大学の福島光哉先生の助言もあって、翌年秋京都に向う前には、中国天台の研究にテーマを変更していた(因に、大谷大学とウイスコンシン大学南アジア研究科とは姉妹関係にある。私は、その両者の具体的関係については、正確にはなにも知らないのですが、あくまでもカッコ付きで補足する。昭和五十七年秋には、真宗学の安富信哉先生がマジンソンを訪ねられた)。彼が、天台智顛以前の真諦訳に次第に強い関心を向けるようになったのもそんな経過が影響していたかもしれない。その他、私がこの会で知り、後に日本とも関係をもった院生として釈恒清さんがいる。永明延寿の『万善同帰集』により中国の禅淨双修思想を研究しようとする尼僧さんで、彼女は、昭和五十七年の春学期が終

るか終わらないかに、田中良昭先生を頼って駒沢大学に学び、後、京都にも学んで、私が帰国するころには再びマジンソンへ戻った。以上の三人が中国仏教を専攻していたのに対し、専らインド仏教の研究に焦点を絞り、特にアビダルマ思想に強い関心を寄せていたのが、ポール・リググリス氏である。彼は、オックスフォード大学(The University of Oxford)で神学とインド古典宗教(Classical Indian Religion)の学位を得た後、ウイスコンシン大学に学びに来ていた院生で、サンスクリットやパーリについては、ほとんど完璧な学力を身につけていた。彼は、私の帰るころの話では、今秋より大谷大学で桜部先生についてアビダルマを研究する予定であったが、最近のニュースでは、母校に戻って教鞭を取ることになると聞く。

さて、外国の院生相手に講読会を行ったなどといえば聞えはいいが、英語も満足に話せない私が中心であってみれば、実のところは講読会の体裁もなしていなかったわけである。私はただ、チベット訳を中心にそれを英訳しタイプしたものを教場に配って、それを読みあげたに過ぎない。簡単な質問には簡単に答えることができて、それが院生同志の議論に展開したり、複雑な質問にでもなれば、もう聞き取ることさえかなわぬ始末である。そんな時いつでも気軽に登場願ったのが、ポール・スワンソンであった。彼がいなければいつも

立往生しっ放しであったに違いないが、また同時に彼がいたお蔭で常に易きにつく私の性癖が改まらなかつたのかも知れない。議論は、私とキーナン氏とが口角あわを飛ばした（英語はできなくともあわくらは飛ぶのである）教義上の問題を別にすれば、多くは翻訳上の問題に集中したといえる。例えば、*jñāna* の訳を、*prajñā* の通例の訳語となっている *wisdom* と区別して、これとは異った *gnosis* や *knowledge* に改めるべきか、などと言うことがすぐ問題となる。しかし、この種の問題に明確な解答があるはずもなく、仏教の術語を一定の英語に標準化しよう（standardize）という E. Conze などの努力（Conze, *The Memoirs of A Modern Gnostic*, Part I, Manchester, 1979, pp. 65-67 参照）もいまだアメリカで定着しているとは言い難い。さて、このような個々の術語の英訳の問題はともかくとしても、我々の英訳全体のスタイルをどこに定めるかということは、この会としてはもっと重要な問題であった。私の英訳は、自らの貧しい英語表現力も災いして、当然のことのようにガチガチの直訳にならざるをえない。しかし、基本的には、種々の問題を抱えながらも、昭和五十七年の春学期を終えるまでは、この直訳態が踏襲されたが、その後、このスタイルは、もともと直訳には反対であったキーナン氏により、抜本的に改訂されることになった。私自身、見えざる学者仲間試験答案用紙を提出するような直

訳には大きな疑問を抱いているが、翻訳の問題はここで簡単に論じきれぬほど単純なものではない。私は、自分が日本人であることもあって、最後ころには、英訳一般についても甚だ懐疑的となったが、その私を阻止するかのようになり、最後はキーナン氏が猛烈にスパートした。昭和五十七年十二月十六日、彼のお宅で、第十章全三十九節（Lanotte ed. による）中の第三十一節までを註釈と共に読み終え、これをもってこの会を一応閉じると宣した後も、そこに至るまでの語彙索引カードやチベットのローマナイズ草稿を私に託し、そのチェックを私に委ねたのである。私は、年を越してから、次第にがらんとしていく部屋の中で、これだけは遣り残すまいと思った。マジソン出発の前日に、チェックし終わったものを彼に手渡した時には、心底ほっとしたものである。彼からは、帰国後の最近も手紙があり、第三十二節以降についても、やり進めた仕事を近々送付したいと言ってきた。もし万一、『撰大乘論』第十章及びその関連文献の英訳が公けにすることがあるとすれば、それはひとえに彼の尽力の賜物であるに違いない。

この会が Eagle Heights Community Center で発足した当初は、留学準備のためすぐこの会を去ったジェイミーや数回しか出席しなかった人を別にすれば、その主要メンバーは、キーナン氏を始めとする、ポール・スワンソン、ポール

ハグリップフィス、釈恒清の四人であったが、教場を Van Hise Hall に移すや、更にアレックス・ノーグトン (Alex Naughton)、『ジョン・ニューマン (John Newman) の二人も加わって六名となった。アレックスは、ハーヴァード大学 (Harvard University) を出てからマジンソンに來た院生で、チベット語もよくでき、日本語も私の滞在中に習い始めていた。『現觀莊嚴論』 (Abhisamayālaṅkāra) を研究したいと言っていたが、一つのテキストをじっくり読むタイプというよりは、そこに収りきれない破格で自由な、よい意味でアメリカ的なスケールの大きさを持っており、時にはそういう自分をもてあましているかにすら思われた。ジョンは、カリフォルニア出身と聞いたが、チベット語は読むのも話すのも非常によくできた。チベット語はインドで習ったと聞いたが、ソーパ (Sopa) 先生に傾倒してマジンソンに來た風も見受けられた。アメリカ人にしては珍しく、自分の考えを強く主張することもなく、研究テーマも定まっていないうようなのだが、その静かな物腰は、なにか宗教的な迷いでも秘めているようで、私には、また違った意味で心引かれる院生であった。昭和五十七年の春学期からは、大谷大学の修士を終了して來た、兩瀬渉氏も加わって七名となったが、Van Hise Hall の一室を教場として使用した、昭和五十六年秋学期と同五十七年春学期の間は、講読を五時に終えると、ほとんど皆んなで、大学構内を

東西に突き貫ける University Avenue 沿いのメキシコ料理店 'Dos Bandidos' で飲みながら夕食を共にするのが慣いとなった。Van Hise Hall を去った後は、必ず参加したのは、キーナン氏とポール・ハグリップフィス氏だけになったが、私の帰国間近の一月二十八日には、かつての仲間が皆んな (ただし釈恒清さんは日本留学のため不在) 集まり、マジンソン西部にある中国料理店で私のために歓送の一席を設けてくれたことは、非常に嬉しい思い出となった。この時には、大谷大学での留学を終えてマジンソンに戻っていたビル・カーツ (Bill Katz)、ハワイの開教師を経てウイスクンシン大学で改めて仏教の勉強を志していた大正大学出身の後根定爾君も加わってくれたのである。

(二) 論文執筆のこと

私がマジンソン滞在中に執筆した論文についても、先の経過報告中で既に触れたが、今再びそれらを掲載誌及び掲載予定誌と共に列挙し直せば次の四点である。

A 「敦煌出土チベット語唯識文献」(『敦煌胡語文献』講座・敦煌、第六卷、刊行予定不明)

B 「チベットにおける唯識思想研究の問題」(『東洋学術研究』第二十一卷第二号、昭和五十七年十一月)

C 「Mahāyānasūtrālamkāraika 最終章和訳」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四十一号、昭和五十八年三月)

D「八法身V覚え書」(『成田山仏教研究所紀要』特別記念号、昭和五十八年十二月刊行予定)

AとDは日本を発つ前から執筆の決っていたもの、BとCはマジソンに留ってからの依頼を受けたものであるが、いづれにせよ、書くと決めた以上は、日本にしようとマジソンにしようと書かねばならないわけだから、マジソンで執筆した原稿が直ちにマジソンでの成果に結びつくはずのものでもない。事実、四点の論文中、マジソンでなければ書けなかったといえるような論文は一つもない。ペリオやスタイン蒐集のチベット文献中から唯識関係の文献を渉猟し検討した仕事、Aの執筆時には、むしろ情報量も多い日本にいた方がどんなによいか知れないと思ったほどである。しかし、CやDは、確かに、日本にいても書けたかもしれないが、マジソンにおける『撰大乘論』の講読会の成果と無縁のものではなかったことも事実である。否、無縁どころか、その講読会との関連を明記したCはもとより、D執筆の時も、法身を巡るキーナソン氏との長い議論がそれを書く動機になっていたといえる。しかし、帰国後のつい最近出たゲラでDを読み返してみると、我ながら未熟な論文で汗顔のものであるが、法身については、今後更に検討し直してみたいと思っている。Bは、Aの成果を踏え、「マイトレーヤの五法」を中心に、チベット仏教の前期・後期伝播期における唯識の問題点を敷衍して述べ

たものに過ぎず、特に後期の問題点に関しては具体的な論証を欠除しており、今後の検討に俟つべき側面は多いが、私なりにこの方面に新たな見通しをつけることはできた。この方面の研究では、インドで出版のチベット関係図書が自動的に入ってくるウイスコンシン大学 Memorial Library はなんとも羨しい限りなのだが、いる間は精査もせず帰ってからだ指を銜えているような男には、どんなに好い環境も所謂は猫に小判であるに過ぎない。そんな自分とはかくとして、ゲルク派のソーパ先生につきながら唯識に強い関心を示している院生にジョン・マ克蘭スキー(John Makransky)という男がいた。私は、ソーパ先生のクラスで彼を知っていたが、私の帰国も間近になったころ、ジョン・ニューマンを紹介して電話があり、彼と単独で会ったことがある。彼は日本語を学んでいなかった(チベット仏教を専攻している院生で日本語をやるものは一人もいなかった)が、私は自分のB論文の抜刷をあげ、その要点を舌足らずの英語で説明した後、今日のゲルク派まで及んでいるマイトレーヤ伝承確立の軌跡を批判的にチベット文献史上に跡付けてみることは重要な課題であると結んだ。Memorial Library チベット関係図書が彼によって精査されることを私は密かに期待しているわけである。さて、以上の四点の論文は全て日本語で書いたものであるが、せっかくマジソンにありながら、私が英文で書いたもの

はほとんど皆無に近い。国際仏教学会で発表した“The *Ak-sarāsi-sūtra* and the *Bahudhātuka-sūtra* in Relation to the Historical Background of the *Yogācāra* Literature”は、拙稿「三乗説の二典拠——*Aksarāsi-sūtra*と*Bahudhātuka-sūtra*——」(『古田紹欽博士古稀記念論集・仏教の歴史的展開

に見る諸形態』昭和五十六年六月)を単に自分で英訳した(ジェイミーとキーン氏とに添削はしてもらった)だけにすぎず、新たに準備したオリジナルなものではない。この論文はチベットの学僧、チャンキャ(Cang skya)が三乗説の典拠として引用する不明の経典を考察の出発点としたが、後に、松本史朗氏によって、その引用を含むチャンキャの記述自体が、カマラシーラ(Kamalasīla)の *Madhyamakaloka* に全面的に依拠するものであることが明らかにされた(『*Madhyamakaloka*の一乗思想——一乗思想の研究(一)——』『曹洞宗研究員研究生研究紀要』第十四号、昭和五十八年三月、二九四—二九三頁、及び二六六—二六七頁、註一六参照)。私の英訳は、いわば再説にすぎないから、どの雑誌にも寄稿していないが、万一後日そういう機会があれば、右の松本氏の成果に基づき書き改めねばならぬものである。第三十一回国際アジア・北アフリカ会議に宛た英文発表要旨はわずか三百語程度のもので、A論文執筆中に知った『解深密経』の新旧両チベット訳の比較と、私が新たに確認した同旧訳の一断片(S・No.六八三)に関する報告とを

骨子とする。しかし、それ以降、なにも詳細には調べておらず、それが果して発表に値するかどうかなど、この「滞在記」を書き終えてから、いろいろ調べてみなければならぬところが多いというのが実情である。

(三) 英会語修得失敗譚

以上、大学から命じられた目的中、「インド、チベット仏教の研究」という側面を念頭に置きながら、「講読会」と「論文」の成果について触れてきたが、ここで、残るもう一つの側面「英語による会話、作文の能力増進」の成果についても答えておく義務があるだろう。しかし、残念ながら、これは端的に完全なる失敗であったと答えざるをえない。得体の知れない研究などというものは、どうとでも格好のつくものであるが、英会話となれば、身に着かないことには格好もつけようがないのである。従って、以下は、失敗も成果のうちであるとして一種開き直りの態度で報告に及ぶよりほかはない。作文の方は、行く前から、その気になればなんとか書くことはできたから、行った後、その能力が極端に低下したのでない限りは、「まあ増進したろう」くらいの程度の曖昧さでなら、肯定することはできる。しかし、話すという点では、その成果は誤魔化しも利かない歴然とした形で現われてくるわけである。

まず、そもそもの失敗の原因は、「行けばなんとかなる」

という甘い気持ちにあったと思われる。出かける前には、その種の学校へ通う暇もなかったし、通う気持ちすらなかった。始めてシカゴへ着いて飛行機を乗換えた時に、荷物を依頼したポーターの言っていることがまるで聞き取れなくて、甘い気持ちにも楔を打ち込まれたような格好だったが、喉元過ぎればまた元の木阿弥である。着くとすぐ、日本語の通じる人々に囲まれ、「英語の学校へ通ったってどうせものにはなりませんよ」と清田先生などに言われてみれば、たちまちそんなものかという気になってしまふ。「行けばなんとかなる」というようなことは、環境を肌で吸収せずにはいられない子供か、それを意識的に実行できる大人にのみ言いうることなのであって、のほほんと暮している身に「行けばなんとかなる」などということは決してありえないのである。その意味では、子供の暮しぶりには誠に羨望に値するものがあつた。その点、子供は皆んなそうなのであるが、ここでは敢えて自分の息子のことを例に取って話そう。私は自他共に許す親馬鹿であるが、以下は、しかし、決して単なる親馬鹿で言うことではない。

私共は最初の夏休みが終るまでは文字通り親子ベッタリな生活であつたから、その間は息子も、言葉に関しては日本にいるのも同然であつた。しかし、夏のある日、隣家の息子と裏庭で遊んでいた次男(当時二歳半)が、「ノー」と強くなにかを

拒絶されて以来、「いやだ」とは決して言わず、その仕草と共に「ノー」とばかり言うようになったのには驚かされたことがある。息子は二人とも、その夏休みが終つた八月三十一日より、幼稚園(nursery school)へ通うことになつたが、その最初の学期が終る三ヶ月半後の父兄会では、長男の英語は既にパーフェクト、次男のも同じ年頃のアメリカの子から見ても早い方だと言われた。しかし、この間は、家に帰るとたちまち日本語に戻り、英語は極少数の単語を除いてめつたに口にすることはなかつた。兄弟の一方が英語を口にするとは、翌年の終りごろからだつたと思う。英語の絵本も結構買って与えたが、それを下手な親心で日本語に訳して読んでやるうもものなら、必ず英語で読めと催促されたものである。英語を話す人とは英語で話し、英語の本は英語で読まなければならぬという気持は、子供には極当然のこととして最初から芽朋えていたように思われる。性格的にも積極的な長男は、英語も自分でかなり読めるようになり、それは少なからず幼稚園の先生を驚かせたようであるが、帰国間際には *Astronomy Today* という小学高学年向けくらいの天体の本に夢中になつていた。帰国後、日本の幼稚園に入れることに決めた時には、二人とも英語しかできないから日本の幼稚園には行かないと平然と日本語でしゃべつていたものだが、通い始め

たその日からそんなことは一切言わなくなった。最近英語を忘れさせたくないと思って、親が時々英語で話しかけようものなら、日本語で話せよと言われる始末である。帰国後五ヶ月、英語は既に息子共の頭を完全に去ってしまったかと思われる。天体の本も、英語のあるからいいじゃないかという親の説得も虚しく、日本語のものを買わされてしまった。息子にとって、ここはもうアメリカではなくあくまでも日本なのである。そういう形で、子供は自分の置かれた環境を姿を通して一心に吸収する。普通は、いとも容易に言葉を覚え、てしまう子供の方に目が注がれがちだが、子供は実は懸命になって言葉の姿を模そうとしているのである。私の息子は二人ともそうであったが、英語をよくしゃべり出す直前には、まるで意味はなさないけれども極めて英語の調べに近い一人言をベツトに横になってから繰返すのが常であった。アメリカ人が肯わない時や返答に窮した時によくする肩を窄める仕草も子供はいつの間にか全く自然に身につけていた。私はそういう息子を見るにつけ、宣長の「姿は似セガタク、意ハ似セ易シ」という言葉を思い出し、似せ難い姿から似せ易い意へと言葉の正道を極自然に歩んで行く息子の姿には驚嘆すら覚えたわけである。

しかし、驚嘆するのは、私共がもはや子供には戻れない大人になってしまったことの証でしかない。言葉の似せ易い意

について、辞書と文法書があればすぐ当の国語が読めるようになるというのは、いわば邪道で、大人なら誰しも邪道は歩けるのである。それを正道だと思い込んでいけば、似せ難い姿の方が勝手にその人から逃げていくに過ぎない。その人が、似せ難い姿を敬遠しているかのように思うのはあくまでも錯覚である。それが邪道と分かれば、子供のように正道を取るしかない。ただ大人にはそれがひどく退屈で困難な道に思われるだけである。しかし、それを続けることこそ努力といわれるに値するものであろう。私も努力を惜んだわけではないが、いつもどこかに逃げを打ち、それに本当に気づくのは遅かったかもしれない。しかし、気づいた時はもう最後の足掻きでしかなかった。アメリカにいてアメリカにいるように暮すことはそれほど難しいことなのである。

人の失敗を聞くことは楽しい第一ためになる。そんな気持ちもあって、自分の失敗を徹底的に書いてやろうと思っていたが、なんとなく弁解がましく、しかも説教がましくなっていくような気がするので、このあたりで止めておく。

(四) アメリカの仏教

私がアメリカに出発する少し前に、当時の仏教学部長、光地英学先生に、私と同じ時期に京都で研究することになった石井修道氏と共にお部屋に呼ばれてお酒を頂戴するかたわら、饒の言葉を賜ったことがある。その折、光地先生から

は、研究もさることながらもしできればアメリカの仏教の事情もしかとその眼で確かめて来るようにと言われたが、右に断ったような英語の力では、到底その任に耐えることはできなかったというのが実情である。第一、マジソンからほとんど出ることなかったのに「アメリカの仏教」などという見出しを掲げること自体が痴がましい。しかし、光地先生のお言葉はやはり私の気持の奥底には引っかかっていたので、今は分不相応にもそんな見出しをつけてみただけである。

ひところは、禅ブームといわれていたアメリカの仏教も、今はチベット仏教が禅に代って力を延ばしつつあるという見方をするものは多い。そのようなアメリカにおけるチベット仏教の動向に先鞭をつけたものとして、ニンマ派のタルタンリ、トゥルク (Tarthang Tulku)、カギユ派のチオエギヤムリトウンパ (Chogyam Trungpa) の活躍が有名である。トゥルクは、一九六九年、カリフォルニア州のバークレーに到り、そこに設立した The Tibetan Nyingma Meditation Center を中心に活躍し、トゥンパは、翌年、ヴァーモント (Vermont) 州のバーネット (Barnet) に到り、後更にコロラド州のボルダー (Boulder) にも拠点を拡げて活躍している。このようなチベット仏教の二系統が、出版事業なども含む華々しい宗教活動をを行っているのに対し、チベット仏教の主流ともいえるべきゲルク派の活動はむしろ地道なものに思われる。その拠点

が、一九五八年、ゲシェニワンゲル (Geshe Wangyal) によって、ニュージャージー州のワシントンに設立された The Lamaist Buddhist Monastery で、そこではチベット僧院風の学問伝統が重んじられてきたらしい。学問的にはいろいろな評価もあるが現在アメリカのチベット仏教学者として名声を博している Jeffrey Hopkins や Robert Thurman 教授は、一時、このワンゲルの門に身を投じた人である。そして今や、マジソン郊外にある The Deer Park Meditation Center がゲルク派のもう一つの拠点となっているとみてよい。ゲシェニワンゲルによってニュージャージーに呼ばれ、ロビンソン教授によってウイスコンシンに呼ばれたソーパ先生が、実質上そのセンターを取り仕切っているわけである。

一九八一(昭和五十六)年七月、ここでダライラマ十四世を導師として Kalachakra Initiation (時輪タントラに導入するための仏教行事。時輪タントラは、プトゥンによってチベットに伝えられツォンカパによって継承されたものであるが、ゲルク派教義上におけるその正確な位置づけは私の詳しく知るところではない) が開催された。後の発表では参加者は約千二百人とのことであった。私も一日のみ参加したが、寺の前に張られた大きなテントの中で、ダライラマの入堂を待つかなりのアメリカ人が、じっと結跏趺坐している姿が印象的であった。帰国時、私の家具の大半を買ってくれたアメリカ人女性はソーパ先生

のお弟子でチベット僧衣をまとった完全な尼僧さんであったが、私が家具の下から這い出たゴキブリを踏みつけたところ、お前は仏教徒ではないのかと金切声を出されてしまった。そんな光景も私にはテントの中のアメリカ人と重なって見えてくるのである。

チベット仏教と比較されて話題に上る禅仏教も急激に下火になったとは思われない。アメリカにおける曹洞禅の顕著な流れは San Francisco Zen Center の鈴木老師 (Shunryu Suzuki Rōshi) に始まると見てよいようであるが、その法を嗣いだのが Richard Baker Rōshi であることはよく知られている。また、同じく鈴木老師のお弟子でありながら、師の死(一九七二)後、居をミネポリス (Minneapolis) に移し、新たに Minnesota Zen Center を設立したのが片桐老師 (Daimin Katagiri Rōshi) である。しかし、ここでは、実際見もしないことではなく、アメリカでひっそりと禅の指導にあっている私の友人のことを紹介しておこう。大学院時代の私の友人、吉田収氏は、ウパニシャッド哲学を研究していたが、十年以上も前にアメリカに渡り、コロンビア大学の Alex Wayman 教授について Ph.D も取得したが、その後考えるところあって、セントルイスに住し、居士として曹洞禅の指導に当たっていた。私は渡米の翌年、春学期が終了するや家族と共に彼の家を訪ねたが、かなり広い芝生をかかえたその普

通の人家が同時に Missouri Zen Center でもあったのである。私はそこで、二日間、早朝に集ってくる数人のアメリカ人と共に坐禅を共にした。彼の奥さんは、セントルイス交響楽団のヴァイオリン奏者を務める日本の方であったが、職場を同じくするその友人の片岡御夫妻共々、鈴木ヴァイオリン教室の鈴木俊一氏(その教授法は Suzuki Method としてむしろアメリカで有名、片岡夫人はその直接のお弟子とも伺った)の敬愛者でもあった。吉田氏は、居士としてのあり方を通じたかったようであるが、その秋ころ、先の片桐老師の下で得度した時は、見事な剃髪姿で飛行場に現われたのである。彼は『正法眼蔵』や『学道用心集』など道元禅師の著作の英訳にも心がけ、その一部は既に出版されている。私には、そういう彼の地道な活躍が非常に嬉しく感じられた。彼は、将来、自分たちは小さなマンションにでも移り、現在の家全体を禅堂に使いたいと言っていたが、できるだけ早くそれが実現することを私は今でも願っている。

以上、「アメリカの仏教」についてなにかが言えたわけのものではないが、その大いなる欠落を埋めるために、次の二書を紹介しておきたい。

Charles S. Prebish, *American Buddhism*, Duxbury Press, North Scituate, Massachusetts, 1979.

Rick Fields, *How the Swans Came to the Lake: A Narrative History of Buddhism in America*, Shambhala Publications, Boulder, Colorado, 1981.

(五) 畑仕事と幼稚園

マジソンの我が家の右手前方に約一、〇〇〇坪ほどの畑 (University Houses Garden) が広がっていたことは、始めに既に触れたが、私共は、その一区画約一〇坪くらいの畑を借りて、二ケ年、息子と共にその畑仕事に精を出した。これは誠に楽しい経験であって、言葉に関してはアメリカの生活を実感できなかった私共も、畑仕事に関しては文句なく成果が挙げたのである。これが私のマジソンにおける成果報告であるからには、この粉れもない成果についてこそ、生き生きと筆を運んでみたかったのであるが、もうそろそろ紙数も尽きてきた。息子は、いわばこの畑の土の中と、University Houses 内の幼稚園 (University Houses Nursery School) で育つたみたいなものだから、マジソンの気候と風土を描写しながら畑仕事の成果に触れ、日本の幼稚園と比較しながらマジソンの幼稚園の様子にも言及しようと考えていたが、全て中止せざるをえない。願わくは、見出しだけでも残そうとした我が胸中を察せられたい。

おわりに

帰国後まだ五ヶ月も経っていないという書き出しで本稿を書き始めたが、筆は思いのほか進まず、今はもう満五ヶ月も過ぎてしまった。この間、日本の幼稚園も休みに入り、続いて梅雨も明けて、急に気持がだれてしまったこともあるが、自分の過しき方を振り返ってこんなにも苦勞するのはもうこりごりである。

苦勞したわりには文章も締りなく、私情にも流れて、報告の態をなさない箇所も多いことと思うが御寛容願いたい。そもそも私は、客観的な報告の才には恵まれていないのだと思う。こんなことがあった。清田先生の奥様は範子という名の背のすらりとした歴とした日本女性であったが、お会するまでは間違いないかと思ひ込んでいた。出かける前のキーナン氏の手紙には Nora と書かれており、それが範子という名の愛称であることなど全く思ひもかけなかったからである。かつて清田先生宅に伺ったことのある平井先生や岡部先生に少しでも奥様のことをお聞きしておればこんなへまなどもとよりありえることではないが、私の場合は得てしてこういうことが多い。清田先生の奥様には、私的な面では先生以上に家族皆んながお世話になったから、この私の最初の至らなさは、時間がたつごとに益々恥しく思ひ出されるので

ある。ともかく私は、いろんな場面で、報告の第一歩ともいうべき情報の蒐集能力に欠けることの多かったことを認めざるをえない。

昨日、そんな能力の欠除した私のところへたまたま一通の手紙が舞込んだ。マジソンにいる両瀬渉君からである。それによれば、ポール・グリッフィス氏は、今夏より一年日本に御滞在の清田先生の代講としてウイスコンシン大学の教壇に立つことになり、業績次第によっては同大における将来もありえそうだという。母校オックスフォード大学に戻るというのも決して誤報ではなかったから、先の記事はそのままにして手を加えなかったが、彼が同大に残るようなことにでもなれば、私が同大について心配していたことも単なる憂慮に終ろう。同大にとっての好きニュースを末尾に加えて、この「滞在記」を終ることにしたい。

（昭和五十八年七月十八日―三十一日）